## 82　誌上発表　西鶴作品にみる身体に関する語（七）

計良　吉則
赤城少年院 医務課診療所

『日本永代蔵』六巻六冊は，貞享五年（1688）に刊行された．西鶴の晩年に書かれた本作品は「町人物」の一作目であり，富んだ商人から貧しい町人まで，金銭に固執するそれぞれの人々の生き様がリアルに描かれ，経済小説の先駆けとして位置づけられている．

本作品の中の身体に関する語に着目し，それについて調査することは，当時の人びとの身体観を知るうえで意味のあることと考える．

まず，全身を表すものの中では「身」という語が圧倒的に多く（129か所），前回まで調査した「武家物」三作品と共通している．実際には「その身一代」「身にかへても」「身の程を」「身を持ちかためし」「身過にかしこく」のように用いられている．「肌」と「骨」はそれぞれ3か所ずつであった．

頭部においては「頭」が12か所と最も多く，「正直の頭（かうべ）をわらして」「頭（かしら）に紙子頭巾を被らせ」のように用いられている．「首」と「面」はそれぞれ7か所ずつであった．

躯幹において最多は「腰」の11か所で，「腰の屈みし後付き」「腰の物を拵へ」のように用いられている．また「胸」と「腹」はそれぞれ7か所ずつであった．

四肢の中では「手・指」が圧倒的に多く，152か所みられ，この結果はこれまで調査した西鶴作品に共通している．実際には「手遠きねがひ」「横手打ちて」「編笠ぬぎて手に提げ」「片手に置き習ひ」「手に懸けて」のように用いられている．「足・脚」は29か所で，「足を延ばし」「足もとに」「足にはたらきて」のように用いられている．「腕」は1か所であった．

五孔では「眼・目」が最も多く，70か所みられた．「目に角を立てて」「目をかけしに」「目に見るばかり」のように用いられている．「口」は41か所で，「下がり口」「口を窺ひ」のように用いられ，「耳」は7か所，「鼻」は6か所であった．

分泌物等では「涙・泪」が多く，5か所みられ，「泪は袖にあまれる」のように用いられている．「息」は1か所で，「息も引き入る時」のように用いられていた．

これまで調査した西鶴作品に共通して，「身」と「手・指」の二つが他の身体部位に比して桁違いに多い理由に関して，ヒントとなる記述が『日本永代蔵』の中にある．巻五第二「世渡りは淀鯉のはたらき」において，親の代から油屋だった山崎屋は次第に羽振りが悪くなり，素寒貧となった後に裸一貫から商売替えをして再び繁盛するようになる．その中に「俄かに昔の宝寺を祈る甲斐なく，手と身になりての思案，何とも埒の明かぬ世渡り，……」との記述があり，「手と身になりて」が「体一つの一文なしの状態になって」の意味で用いられていた．西鶴は体全体を表す際に，「身」だけでなく敢えて「手」を加えて記述しており，西鶴にとって「手」は特別な身体部位であり，「身」として一括することが憚られた可能性がある．体全体は「身」と「手」を合わせたもの，という感覚であろうか．現代においても「身振り手振り」という語で体全体の動きを表現するのは，こうした流れによるものかもしれない．英語で表現すると単に「gestures」である．

別にもう一点，興味深いことがある．巻二第三「才覚を笠に着る大黒」において，放蕩の末に親から勘当された新六が犬の肉を狼の肉と偽って売り歩く場面において，「山家の作り言葉になりて，「狼の黒焼は」と声の可笑しげに売りて」との記述がある．『和漢三才図会』の第三十八「狼」の項には，狼肉が五臓を補益し腸胃を厚くする，腹に冷積のあるものは食べるとよい，と記載されており，当時は狼の肉は薬効の点からも重宝されていたことがうかがわれる．